

* 目次 *

『人はなぜ生きるか』

宗教のこころ	11
日本人の宗教心	30
日本の私とヨーロッパのキリスト教	44
私にとっての神	60
私にとっての祈り	73
私にとっての聖書	93
私とリジューのテレジア	112
イエスのまなざし	124
クリスマスが語りかけるもの	147
『イエスのまなざし——日本人とキリスト教(抄)』	
日本人のみるキリストの顔	161

友への手紙	171
大地のように私たちを包むもの	178
神に問う苦しみ	189
同伴者イエス——遠藤周作のイエス観	197
	*
	*
	*
《寄稿エッセイ》「井上洋治神父様のこと」(細川俊夫)	224
《再録エッセイ》「めぐりあい——畏友『彼』」(遠藤周作)	228
「神は対象化しえない」(井上洋治) (遠藤周作)	231
隠された人生の意味 (若松英輔)	233
解題 (山根道公)	242

宗教のこころ

人生で一番大切なこと

私たちが日常生活のなかで、ふつうに接する宗教には仏教、キリスト教、天理教、その他いろいろな宗教があると思いますが、そういったものに共通した世界と申しましょうか、心と申しましょうか、そういうものがあることをこの頃強く感じておりますので、その宗教に共通した世界ということについて考えてみたいと思います。

実はもう何年も前のことになりましたが、ある出版社から、人生で一番大切だと思うことを四〇〇字詰の原稿用紙二枚で書いてもらえないか、という依頼を受けたことがあります。人生で一番大切だということなことを、たった八〇〇字で書いて頂きたいというようなことは誠に失礼だとは思いますが、そういう企画になっておりますのでお受けいただければ有難いということでした。

突然の依頼でもありましたし、何だか断わるのも気の毒なような気がして、まあいいでしょう、やってみましょうと軽く返事をしてしまいました。

いつもものを書くときはそうなんです、主題を何となく頭の後ろの方にしまっておいて、電車を待つて

日本人のみるキリストの顔

杜子春

「日本人にはヨーロッパ人や中国人にくらべて転向ということがたいへん多い。とくに、お母さんがどんなにお前のために悲しみ苦しんでいるのか考えてみる、という言葉がいちばん日本人を転向させるのに有効だ」というようなことを、先日裁判官だったというある人の口から聞いてなるほどと考えさせられた。

芥川龍之介の作品のうちに、それを思わせるような『杜子春』という短篇がある。

金持ちのときにはちやほやするが、いちど貧乏になったら見向きもしない人間の冷たさに、人間であることにつくづく嫌気がさした杜子春という若者が、自分も仙人になりたいと仙人に弟子入りをたのむのであるが、そのとき仙人は、どんな場合にも声をださなければ仙人にしてやろうと約束する。杜子春は地獄に連れていかれ、そこであらゆる種類の苦しみや恐怖に声一つださずに耐えていくが、いまは畜生に堕している自分の母親が、あらゆる責苦にさいなまれているのを見て、ついに「お母さん」と叫んで仙人になる資格を失ってしまうという話である。芥川自身が仙人で何を言おうとしていたかは難しい問題であろうが、私にとって興味深いのは、仙人になろうという杜子春の堅い意志を挫きさったものが、自分の直接うけた苦悩や

《寄稿エッセイ》

「井上洋治神父様のこと」(細川俊夫)

二〇一四年の一〇月、私はフランスの北東部に位置する美しい小さな街、リールに五日間ほど滞在しました。私のオペラ「松風」がリールのオペラハウスで上演され、それがフランス初演であったためにその街をはじめて訪れたのです。オペラハウスは古い街の中心にあり、そこから一時間も周辺を歩けば、大方の街の様子がわかるような小さな街でした。オペラハウスの近くに古い教会があったので、その中に入ってみました。そしてその席に座っているうちに、何かこの街のことをかつて聞いたことがあるような気がして、ずっと考え込んでいました。そしてふと気づきました。この街は井上神父様が、カトリック大学に通った街で、『余白の旅』のなかに出てくる街だ、確か彼はフランス留学の最後の時代をここで過ごされたのだ、ということ。そして彼との出会いのあった三十年前の数年間を思い出して、とても胸が痛くなりました。それからというものの、リール滞在中、ずっと井上神父のことを考え、彼のあの歯切れの良い「声」が耳元に聴こえてくるようでした。彼はどんな思いで、この街を歩いたのだろう。もう六十年も前の時代のリールです。きつと苦しい時を過ごしておられたのに違いない。私は井上神父様の不肖の弟子で、もう長い間連絡も取ってはいませんでした。そして彼がその年に亡くなっていたことも、ずいぶんあとになって知ったのです。

《再録エッセイ》

「めぐりあい——畏友『彼』」（遠藤周作）

昭和二十五年の六月——というから、もう随分昔の話だ。私はまだ大学を出て間もなかった。ひよんなことから仏蘭西留学が決まり、現在、慶應の文学部長である三雲夏生君やその他、二人の日本人学生とマルセイエーズ号という仏蘭西船で横浜を出帆した。

留学といえば聞こえはいいが、昭和二十五年の日本はまだ戦争犯罪国である。世界のどの国とも国交は恢復しておらず、大使館も領事館も行く先々の国にはない。私たちのビザも一年がかりでもらい、パスポートには進駐軍の認定判が押しあつた。そして私たちが乗りこんだのはマルセイエーズ号の四等——船底の暗い部屋だった。

その部屋ではじめて彼とあつた。彼は私たち留学生とちがいで、東大の哲学を出た後、カトリックの神父になることを志して、仏蘭西のカルメル会で修行するためにこの船に乗っていたのである。

一カ月の船旅は戦犯国民五人の日本青年たちにとっては決して楽しいものではなかった。日本が侵攻したフィリピンやシンガポールでは憎悪と怒りの眼が我々を待っていた。マニラでは生命の安全さえ保証できぬと船長に言われ、六月のすさまじい暑さのなか、私たちは船底に三日間、かくれていた。

彼は神父になるというのに、いわゆる私の嫌いなアーメン臭さは何処にもなかった。我々と同じように一等船室の飲み残した酒に酔い、我々と同じように酔っぱらって流行歌を歌った。そのくせ、夕暮れ、人

隠された人生の意味

若松 英輔

たしか哲学者アラン（一八六八—一九五一年）だったように記憶している。強く惹かれた本は一気に読んでほならない、ひとたびページを閉じて本からの呼びかけを待たなくてはならない、そう書いていたがその通りだと思う。人は、言葉からの衝撃があまりに強いとき、それを十分に受け取ることができない。『人はなぜ生きるか』との出会いは、先のアランの言葉を想起させるようなものだった。

講演録『人はなぜ生きるか』は、井上洋治入門としてもっとも適した著作だといってよい。神父をめぐる講演会などで何から読んだらよいかと聞かれると、必ずこの本を挙げてきた。神父と交わりを深めた人のなかにもこの本を愛読する人は多い。しかし、なぜかこの本は、この著作選集に編まれるまでは最初に刊行されたかたちそのまま、いつの間にか古書以外では入手できない状態になっていた。

現代は「書かれた」本を「語られた」本よりも重んじる傾向がある。別な言い方をすると「語られた」本をどこか軽んじる向きがある。この本が井上の全著作のなかでもきわめて重要な意味を持つにもかかわらず、その意味が見過ごされ今日まで再刊されなかったのも、こういった風潮と無関係ではないのだろう。だが、宗教者、特に井上のような宣教師の場合、書かれた言葉においてだけでなく、語られたものにこそ重要な何かが潜んでいることも少なくないのである。

解題

山根 道公

第六卷よりこの場では各巻の「解題」のみを示す。

『人はなぜ生きるか』

『人はなぜ生きるか』は、著者の最初の講演集として、一九八五年一二月、講談社より刊行された。『日本とイエスの顔』の講談社版が一九八一年に刊行されて以来、版を重ねて多くの人に読まれたことが、講談社からの講演集の刊行につながったと考えられる。『人はなぜ生きるか』も版を重ねて、井上神父の著作がキリスト教に関心をもつ人のみならず、宗教全般に関心をもつ人、さらには人生の意味や苦しみからの救いを求める人など一般の読者に広く読まれる契機になった作品である。本書の帯には、「遠藤周作氏絶賛」との囲み見出しとともに、遠藤周作の次の言葉が掲載されている。

井上洋治神父は戦後の日本のなかで最も、素晴らしい、キリスト教思想家である。最も素晴らしいというのはの

次のような意味である。／なるほど、日本には西欧基督教の考えや解釈を語り、紹介する神学者は多いだろう。しかしどこかに、それらは日本人としての歯でかみくだいていない何かがあるような気がしてならないのだ。そのためにその内容がいかに高尚でも借りものの感をまぬかれえない。語るものがいかに高踏的でも説得力に欠けているのである。／だが井上神父のそれはちがう。この本を読めばすぐにお感じになるだろうが、彼は自分の言葉で語っているのである。日本人に生れながらイエスを信じる距離感をどう克服したのか、日本人の彼にとってイエスとは何であったかを借りものではなくて自分の汗と脂とで織った思索をみせながら話しているのである。だからこの本には嘘がない。耳を傾けざるをえないのだ。

遠藤自身、この本に耳を傾け、その思想に大きな影響を受けているが、その点については『再録エッセイ』の解題で述べたい。

次に、個々の講演について同書の「あとがき」にあるもの以上の情報が判明したものに關して触れておく。

「宗教のころ」は、神奈川県主催、神奈川県宗教学連盟後援の一九八四年度神奈川県宗教学文化講座で、「宗教の